
あさはかな男

カルシカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あさはかな男

【Nコード】

N8770R

【作者名】

カルシカ

【あらすじ】

ゲイの主人公が好きな人のために……………。

屋上の手すりに捕まりながら僕はグラウンドを見渡した。放課後のグラウンドは野球部、陸上部、ラグビー部など運動系の部活の練習に使われている。今もそうだ。それにしても屋上にやってきてこうして部活動に精を出す人を眺めるのもなかなかいいものだ。一つのことには一生懸命になっている人を目にする则自分も頑張らないといけないな、と思える。

……というのは真つ赤の嘘だ。そもそも僕はグラウンドを見ていない。グラウンドを見渡しているフリをしているだけで、ほんとは違う所を横目でばれない様に見ている。

「おい、雄治」

僕の横で声が出た。裕樹だ。

「うお！ ……ど、どうしたの？」

すつとんきよんな声を僕はあげた。もしかして横目で祐樹を見ていたのがばれたのだろうか？ もしそうだとしたら最悪だ。

「うお！ ってなんだよ。なにびっくりしてるんだ、お前。ほら、タバコ。吸うだろ？」

裕樹が胸ポケットからタバコとライターを取り出して僕に渡した。なんだ、そういうことか。僕はほつとした。タバコならば大歓迎だ。先生に見つかつたら停学かもしくは退学になるかもしれないけれど、このさいどうでもいい。小学六年生の頃に興味本位で吸つてからやめられなくなっているんだ。

「ありがとう。つか、ごめん、野球部の練習見てたらつい集中しすぎてさ」

僕はとつさに嘘をついた。裕樹に嘘を付きたくないけれど、かといって本当の事を言えるわけでもないので仕方ない。

「そつか。お前、小学校の頃は野球のクラブに入つてたつて言つてたな。中学に入るのをきつかけにやめたとか」

「そうそう。部活の野球は坊主だったからね。僕、絶対に坊主だけはイヤだし」

タバコの煙を吐き出してから裕樹が軽く笑った。僕はなばつばをぐくりと飲んだ。ああ、なんて素敵な笑顔なんだろうか。カメラがあつたら写真を撮りたいくらいだ。なぜ男に対して男の僕がこんなことを思うのか疑問に思う人もいるかもしれない。でも、そう思うのがゲイなんだ。

僕は裕樹のことが好きだ。

「確かにお前は坊主が似合わなさそうだしな」

「だよ。似合えば坊主でも問題ないんだけどなあ」

「まあ、今の髪型は似合うからそのままのほうがよかつたんじゃねえの。ってか、今日屋上に呼び出したのはお前に相談があるからなんだ」

「そ、相談だつて？」

僕はこみあげてくる笑みを必死に押させた。相談するということはずなわち頼られているということに他ならないじゃないか。僕にとっては嬉しいかぎりだ。この高校に入学して同じクラスの裕樹に一目ぼれしてから、なんとか気に入られようと色々なことを話の話題づくりのために本をたくさん読んだり、彼は悪いことをするのが好きなのであまり気は向かなかつたが一緒に万引きなどもした。けれど、裕樹が僕に相談をするということは今日がはじめてだ。

「おう。じゃあ、話すけどよ。実は俺は今好きなやつがいるんだ」
ハンマーで殴られたような衝撃を僕は受けた。

「……ああーなるほど。ふーん。そういうことね、うん」

「は？ なんだよ、そっけねえな、お前。その好きな人が誰なのかとか普通聞くだらうが。馬鹿だろ？」

裕樹が鼻に皺を寄せ口をすばめた。

ああ、この顔はムカついている証拠だ。この顔を僕に見せることは今が初めてだが、ほかのクラスメイトが裕樹にこの顔をされた直

後に、「おまえ、ム力つくな」と言われて腹を思いつきり（僕が見た限りでは）殴られていた。クラスメイトは激しく嘔吐してそれはそれは大変だった。それにしても僕としたことが裕樹の気持ちを考えてにこんなことを言ってしまうとは。やっぱりかなり動揺しているからなんだろう。そうに違いない。

僕は吸っていたタバコを踏みつぶしてから、裕樹の前で土下座した。こうでもしないと裕樹に許してもらえない、と思ったからだ。もちろん、僕にもプライドがあるから本当はこんなことはしたくない。でも、それ以上に許してもらいたかったし、裕樹に殴られるのは避けたかった。

普通の人に殴られるのとは訳が違うんだ。裕樹は体格に恵まれすぎていて。身長約190cm、体重約100キロ。そして、制服の上からでも十分に目立つ、盛り上がった大胸筋や丸太のように太い腕。それらを使って抱きしめられるのならば僕としては全然かまわない。というか大歓迎だ。でも、殴られるのに使われたらと思うとゾツとする。

「ごめん。僕が悪かった。許して……。頼むから殴らないで」
土下座をしながら上目づかいで裕樹を見ると、裕樹は顎をさすりながら何かを考えているようだった。

「よし、わかった。許してやるよ。お前がまさかそこまでするのは思わなかったし。でも、今度からは気をつけるよ。ほら、立てよ」
裕樹が僕の手を掴んで立たせてくれた。心臓がドキドキする。

「うん、ありがとう。今度からは気をつけるよ。それで、あの、好きな人っていうのは誰？」

「西城唯だ。クラスは違うけどお前も知ってるだろ？」
西城唯、あいつか。知ってるも何も小中高一緒だ。

でも、よかった。確か、今付き合っている人がいると聞いたことがあるから、どのみち裕樹は諦めることになるだろう。

「知ってるよ。小中高、一緒だし」

「ふうん。そうだったのか。仲はいいのか？」

「普通かな。クラスが一緒になったりしてしゃべることはあったけど、それほど仲がいいってわけじゃないし。あと、聞いた話だけど今、西城付き合ってる人がいるらしいよ」

言ってから余計なことを言ってしまったかもしれない、と思った。裕樹は僕に仲がいいのか、と聞いただけで西城が付き合っているかいないか聞いたわけじゃない。

また裕樹の機嫌を悪くしてしまったかもしれない、とビクビクしている裕樹は、「そうかそうか」と言いながらうなずいた。

「教えてくれてありがとうよ。まあ、そんなことだとは思ってたよ、俺も。そりゃあ、そうだよなあ。あれだけ可愛けりゃ色んな男が寄ってくる。その中にはいい男だっているだろうし、西城も付き合うよな。でも、俺にとっては西城が付き合ってるか付き合っていないかなんてどっちでもいいんだ。俺は西城と付き合いたいわけじゃねえしよ」

裕樹が口元を吊り上げてにやにやと笑った。

好きなのに付き合いたくない？ 意味が分からない。

「なんで、付き合いたくないのさ？ 好きだったら付き合いたいと思うのが普通だと思うんだけど」

もちろん、僕も裕樹のことが好きだから付き合いたい。

「何だよ、普通って。まあ、いいや。俺が付き合いたくないって思ってるのはだな、付き合ったところで西城を自分のものだけにすることは無理だからだ。俺は朝も昼も夜もずっと西城といたいんだ。俺にとって自分のものだけにするっていうのはそういうことだからな。だけど、付き合ってるだけじゃそんなの無理だろ。だったら、どうすればいいと思う？」

裕樹が僕の真横にやってきてぼくの肩に手を置いた。

「結婚？」

「違う」

「じゃあ、か、監禁とか？ ごめん、それくらいしか思い浮かばないや」

まさかな、と思いながら僕は言った。

「分かってるじゃねえか、雄治。そうだよ、監禁だ。俺は西城を監禁したいんだよ。あっ、もうどうやって監禁するのか段取りは決めているから雄治は心配しなくていいからな。実行に移すのはなるべくはやいほうがいいな」

「えっ、僕も参加しないといけないの？」

「何言ってるんだよ、当たり前じゃねえか。頑張ろうぜ。きつとうまくいくよ。もし、無事成功したら焼肉でも食べに行こうぜ」

僕は少しの間考えた。ここでもし断ったら、きつと僕は裕樹に嫌われる。それだけは嫌だな。あと僕は焼肉が好物だ。裕樹と一緒に食べる焼肉なら最高に美味しいと思う。

「わかった。絶対に成功させよう」

「おう。俺たちなら出来るよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8770r/>

あさはかな男

2011年10月6日07時17分発行